



世界を旅行した女流画家 マリアンヌ・ノース（一八三〇―九〇）

大英帝国を象徴する女性

「日の沈まぬ国」という表現があります。地球全域に領土を保有し、領土のどこかは日中であるという意味です。現在ではイギリスとフランスが該当しますが、この言葉を体現した史上有名な国家はハノーヴァー朝第六代女王ヴィクトリア（在位一八三七―一九〇一）が君臨した一九世紀前半から二〇世紀初頭までの大英帝国です。その統治を象徴するのは女性が単身で世界を周遊する旅行が可能であったことです。

それらのイギリスの女性でも有名な人物は一八七八（明治一一）年に日本に到来し、通訳一人のみを同伴して江戸から蝦夷まで旅行して、その旅程を『日本奥地紀行（原題は日本の未踏の旅路）』という書籍として出版したイザベラ・バードですが、それ以上に世界の隅々までという言葉が誇大ではないほど各地を旅行した女性がいました。この日本の明治時代に相当する時期に世界各地を単身で旅行した女性を紹介します。

キューガーデンズにある美術館

ロンドンの都心から西側一五キロメートルほどのテームズ川沿いに王立植物園（通称キューガーデンズ）があります。一七五九年に王室宮殿付属の施設として開設され、敷地面積が一三二ヘクタールもあります。東京都神代植物公園が五〇ヘクタールですから、その規模が想像できます。ここには大英帝国の威信を象徴するように、世界各地から収集した七〇〇万点の種子植物の標本、一二五万点の菌類の標本が収集されています。



図3 マリアンヌ・ノースの絵画



図1 温帯温室



図2 マリアンヌ・ノース・ギャラリー

園内には数多くの施設がありますが、ひととき目立つ巨大な温帯温室（図1）の背後に「マリアンヌ・ノース・ギャラリー」という煉瓦で構築された目立たないが風格のある建物があります（図2）。ここには一人の女性が大英帝国の領土を中心に世界各地を旅行しながら、それぞれの旅先で植物の生育する自然を描写した絵画八三二点が室内の壁面一杯に展示されています（図3）。その画家が今回紹介するマリアンヌ・ノースです。

名門に誕生した女性

彼女は同様に大英帝国の盛期に世界を周遊したバードについて「病弱で自己顕示意識が目立ち、冷淡な気風の女性」と評価していますが、この言葉は父親が牧師の中流家庭で成長したバードに比較して、マリアンヌが名門の貴族の家庭に誕生したという境遇の差異がもたらしたと想像されます。六代前の一七世紀の祖先ロジャー・ノースは何期か下院議員をした名士であり、『ノース一族の生涯』という伝記も出版している人物です。

マリアンヌの曾祖父はイングランド東部の北海に直面するノーフォークのラファムにある屋敷から、南部のイギリス海峡に直面するイースト・サセックスの港町ヘイステイングスに移転していました。この屋敷で一八三〇年に誕生したのがマリアンヌですが、彼女の父親フレデリック・ノースは彼女が誕生した翌年から死亡するまでの四〇年近くイギリスの国会議員をしており、その意味でも彼女は名門の女性でした。

当時の貴族の普通の生活様式ですが、彼女はほとんど学校に通学することなく、自宅を訪問してくる様々な知識階層の人々から情報を享受していました。一方で有名な生物学者C・ダーウィンからは招待されて自宅を訪問したこともあります。また貴族階層の特徴で、国内だけではなくヨーロッパ全域も家族で旅行しています。一八四八年にヨーロッパ各地で騒乱が発生していた時期でさえ、家族旅行をしていました。

一八五五年に母親が死亡すると、マリアンヌと父親の関係は一層親密になり、イギリスで国会が開催されて議員である父親がロンドンに拘束される時期以外は二人でヨーロッパ各地だけではなく、トルコ、シリア、エジプトまで旅行しています。しかし、その最愛の父親が一八六九年に死亡すると、人生の唯一の拠点を喪失し、女中一人を同伴させて海外に旅立つようになり、それが後半の人生の目標になりました。

世界各地で歓迎された旅行

父親の死後二年が経過した一八七一年になり、マリアンヌは汽船に乗船してカナダ、アメリカ、ジャマイカ、ブラジルへと旅立ちます。しかし、イギリスの名門の出身ということもあり、首都ワシントンではH・フィッシュ國務長官から招待され、長官同伴の馬車でホワイトハウスを訪問してグラント大統領夫妻に謁見し、翌日には大統領主催の晩餐会に招待され、大統領にエスコートされて着席するほどの厚遇を受けます。

一二月になり、温暖なカリブ海域のジャマイカに移動し、キングストン郊外の住宅を賃借して長期滞在を開始します。ここでは住居の周辺の植物を描写する日常でした。

翌年、ジャマイカからブラジルに移動し、イギリスから移住している親子と出会い、二人が生活している内陸のミナスジェライス邸に寄宿、そこでも熱帯特有の植物の採集や描写に没頭し、至福の生活を体験し、イギリスに帰還しました。

世界一周旅行で日本も訪問

しばらくイギリスに滞在して一八七四年から翌年にかけて避寒のために大西洋上にあるカナリア諸島のテネリフェ島に滞在し、ここでも特徴ある植物の描写を堪能します。そこからカナダのケベックに移動し、北米大陸を西進してソルトレークを経由してカリフォルニアに到達しました。ここではセコイアの巨木が林立するヨセミテ溪谷に感動し、さらにサンフランシスコに移動して、汽船で日本に到達します。

日本では自然の景観とともに町並や寺院に感動し多数の絵画を仕上げていますが、真冬の寒気に対応できず、翌年の一八七六年の新年早々にシンガポールに移動、そこからさらにボルネオ島北部のサラワク王国に移動しました。サラワク王国は先住民族の反乱を鎮圧したイギリス人探検家J・ブルックが一八四一年に建国し国王となっていた国家ですが、太平洋戦争になって日本が占領し、一九四六年には消滅しました。

マリアンヌが到着した時期にはブルックは健在で、その邸宅に滞在し、奥地にも出向いて植物を写生しています。そこでマリアンヌは世界最大と推定されるウツボカズラを発見し、彼女のノースという名字を使用したネペンテス・ノーシアナという学名が付与されています。そこからさらにインドネシアのジャワ島に移動しますが、そこは多数の見知らぬ植物が生育している驚異の世界で、数ヶ月間も滞在しました。

さらにシンガポール経由で一八七六年の年末にセイロン（現在のスリランカ）に到着して知人の住宅に滞在しますが、そこで撮影されたのが、この記事の冒頭にある肖像写真です。一旦帰国してからセイロンに戻ってインドに移動、ヒマラヤ山脈の山麓まで出掛けています。これまでの紹介でも彼女が大胆な性格であることが推測できますが、今回も豪雨で大河が氾濫している時期に小舟で横断するなど豪胆な行動をしています。

美術館の開館

一八七九年に帰国したとき、それまで世界各地で描写した植物の絵画をロンドンの画廊で展示したところ人気になり、これが冒頭に紹介したキューガーデンズにある「マリアンヌ・ノース・ギャラリー」の設立の契機になりました。しかし、そのためには、まだ訪問したことのない地域の植物の絵画も必要だということになり、そのような時期に旧知の生物学者C・ダーウィンからオーストラリア訪問を進言されます。

そこで一八八〇年、再度、サラワク王国に出掛け、そこからオーストラリアの北東の先端にあるケープヨーク半島を経由して西岸のブリスベンに到着します。そして、これまでの旅行と同様に総督の公邸に滞在しますが、ナンヨウスギやユーカリなど固有の植物、コアラ、カモノハシ、カンガルーなど固有の動物にも魅了されます。以後は次第に南下して南部のメルボルンに到着し、さらに西部のパースにまで出掛けています。

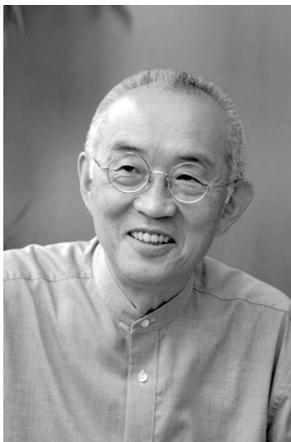
そこからメルボルンの南側にあるタスマニアを経由してニュージーランドに立寄り、北上してハワイを経由してアメリカ本土のサンフランシスコに到達しました。ここからは一〇年前に開通したばかりの北米大陸横断鉄道を利用し、セントルイス、シンシナティ、フィラデルフィアなどに滞在して、各地の植物園などを見物しながらニューヨークに到着し、イギリスに帰還するという世界一周旅行を達成しました。

帰国した一八八二年にキューガーデンズのマリアンヌ・ノース・ギャラリーが公開されました。施設は公園の入口からもっとも遠方にあります。様々な施設を見学した人々が休憩できる場所になる位置を選定したというマリアンヌの配慮からとされています。彼女の自伝には一人の紳士が「これらの多数の絵画は一人の女性の作品だと評判だが本当か？」と質問したので、そうだと返事をしたところ驚嘆したという逸話も紹介されています。

大英帝国を象徴した旅行

開館はしたものの、アフリカの植物の絵画がないことを不満としたマリアンヌは早速、アフリカ大陸南端のケープタウンを訪問し、翌年の一八八三年にはインド洋上のセーシェル諸島に旅行、何枚もの傑作を制作しています。体調不良で旅行は一旦中止しますが、「チリマツ」の絵画がないことを残念とし、一八八四年一月には強風のマゼラン海峡を通過してチリのサンチャゴに到着し、作品を完成させています。

この旅行を最後としてマリアンヌはイングランドの田舎に引退し、一八九〇年八月に六一歳で逝去しました。国際旅行は船舶しか移動手段のない時代に未開の土地を女性一人で旅行した精力には驚嘆しますが、その背後には「日の沈まぬ国」大英帝国が世界を支配したパックス・ブリタニカが存在があります。さらに彼女の場合には独自の効果による旅先での支援もありましたが、それを割引いても偉大な旅人でした。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002-03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）、最新刊「AIに使われる人 AIを使いこなす人」（モラロジー道徳教育財団）など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」とパーサー誌の連載「凜々たる人生―志を貫いた先人の姿―」からの再編集版として、『清々しき人々』、『凜々たる人生』、『爽快なる人生』（遊行社）など。